

# 弱さを真ん中にした コミュニティ

●辻 信一

## 3・11以降に変わったもの、変わらないもの

12月17日に東京で開催される「オムツ外し学会」に作家の高橋源一郎さんが出るんですね。さすが三好さん、目のつけどころがいい。高橋さんは、僕の大学の同僚で、3・11の前に彼と二人だけで「弱さの研究」という共同研究を始めました。それから1年経つか経たないかで3・11（東日本大震災）が起こった。それはすべてを考え直すことを我々に迫るような事態だったわけだけど、「弱さの研究」そのものも例外ではありませんでした。

つまり「弱さの研究」の中に3・11が挟まった格好になっている。ただ、僕は3・11オタクになってはいけないと思うんです。同じように、脱原発というときに原発オタクになってはいけないと思う。3・11は社会の大変革のせつかくの好機だったのに、逆に政治状況は最悪の状況になっている。何てひどいことになったんだろうと多くの人が情けない思いをしている。しかし、本当に政治状況がそんなに急に悪くなったのでしょうか。何が変わったのか、だけではなく、何が変わっていないのかをも考える必要があるのではないかと思うのです。3・11とその後の日本が最悪の状態にあると思う人は、果たしてそれが本当に日本独特の、ユニークな問題なのかどうか、自問してみる必要があると思うのです。

3・11の前からあったもので、3・11後にもますます重要になっているいくつかのテーマがあります。まずTPPです。TPPは民主党政権のときから大きな課題でしたが、3・11の後しばらく後景に退いていました。その後それがまた前面に戻ってきています。TPPというと日本とアメリカの関係ばかりが取りざたされがちですが、それはもちろん世界中に吹き荒れているグローバリゼーションの一角にすぎません。それは、自由貿易の名のもとに、巨大企業の活動をますます有利にするために規制や関税を撤廃するといった、過去30年にもわたって進められてきたプロセスの新しい段階にすぎない。

また3・11後の政治状況を変えたという意味で大きかったと僕が思うのは、山中伸弥さんのノーベル賞受賞です。そしてこれも世界中で起こっている一つの巨大な流れの一角を示している。それは簡単に言えば、生命操作という流れです。メディアの大騒ぎは3・11以来とも言えるほどで、号外まで出しました。その日の新聞はほぼ、祝賀一色でしたが、その片隅に「インドで生物多様性国際会議始まる」という小さな記事が載っていました。その扱いの格差に僕は衝撃を受けたものです。メディアにとって人類の生存の基盤であるはずの生物多様性なんか全然重要じゃない。未来がそこにあるとは思っていないのです。逆に、人類の未来は生命操作にあると、本気で思っているのです。

次に、これはもっと最近ですが、オリンピック東京招致のことです。これも別に急に降って湧いたわけじゃない。長年、緻密な戦略のもとに、膨大な金を使って招致してきたものです。それは3・11後も衰えを見せなかったようです。ここでも僕たちがこのポスト3・11時代に抱えている深刻な問題の数々を見ると、どれも3・11後の変化ではなくて、むしろ変わらなさを示しているように思える。旧態依然で、全然変わっていない。しかも、日本の特殊性というよりは、世界中で当たり前前にみられるような困った姿を日本もさらけ出しているということなのではないか。もしかしたら

こういう政治状況に不安を感じたり憤ったりしている自分たちも、3・11でショックを受けたりした自分たち自身もまた、そういう変わらなさをずっと抱え込んで今に至っているのかもしれないと思うんです。

## 「弱さの研究」

僕と高橋源一郎さんの「弱さの研究」も3・11の前から始まっていました。さらにその数か月前、高橋さんは、自身の幼い子どもが重病にかかり非常に危険な状態に陥った。医者から、生き残ったとしても重度の障がいを抱えることになるかもしれない、と告げられたそうです。彼は悶々と丸一日悩んだそうです。異常な興奮状況の中で朝が来て、奥さんに、「これからいろいろあると思う。苦労すると思う。しかし、シンちゃんを育てていこうね」と告げると「あなた、その結論に達するのに24時間もかかったの？ そんなこと5分考えればわかるでしょ」と奥さんに笑われたそうです。その後、お子さんはよくなっていくのですが、僕と会って話したのもその頃だった。どちらからともなく「弱さ」の話になり、共同研究をやることになった。そのときに、「行きたいところがある」と言って真っ先にあげたのが、イギリスの子どものためのホスピス「マーティン・ハウス」でした。

そして、1年ぐらい経って3・11が起こった。3・11の直後に僕らは会って話しました。3・11って何だったのか。これってたぶん、「強い」とか「弱い」とかという価値観からなっている僕たちの存在の土台自体が揺るがされたということだよ、という感じを共有したのだと思う。僕たちは、その後、3・11を引きずりながらいろんなところをフィールドワークして歩くことになります。そして弱さをキーワードにいろんな人に会っていく。二人それぞれの旅に出たわけです。

さて、僕の旅の中からいくつかお話してみたいと思います。

## 経済成長の中で生きるとは

僕はそれ以来、19か国を訪ねました。途上国にも先進国にも行きました。歩いてみると、大体どの国も状況がよく似ている。政治状況がいいところなんかありません。「歴史上こんなに悪かったことはない」とどこへ行っても言われます。

3・11オタクになってはいけない、というのはそういうことなんです。つまり僕たちは、日本が特殊だということをあまりに強調しすぎてはいけません。むしろ、世界中に起こっている大きな変動が、日本では3・11によって表面化し、可視化されたということであって、危機は何も3・11によって生まれたわけではないということを僕は言いたいのです。では、常に世界中に脈々と続いていた流れとは何かというと、簡単に言えば、人間が金に身を売ったということでしょう。経済が完全に支配する世の中をつくってしまった。我々はそこから生じる数々の問題のあれこれをとらえては、いろいろ文句は言ってきたにしても、大筋としては、この巨大な流れに身を任せ、ある意味ではその中で生きていくことを選択してきたのではないのか、ということです。

だから、どこの政府も経済成長を言い続けなければいけない。経済成長を叫ばずに政権に就くことはできないでしょう。安倍首相だってある意味、現代世界の政治家としてごく当たり前のことを言っているだけです。「普通の国」というスローガンがあったけど、彼だって自分は世界中の政治

## 辻 信一 (つじ・しんいち)

文化人類学者。環境運動家。明治学院大学国際学部教員

著書に『スロー・イズ・ビューティフル』『自然農という生き方』『ナマケモノ教授のぶらぶら人類学』など多数。高橋源一郎氏との共著『弱さの思想』がこの冬刊行予定。

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/>



家たちと同じ、「普通」のことを言っているだけだと思っているんじゃないか。経済を信奉する社会の行き着いた先が、大企業の下僕としての政府であり、パクス・エコノミカ（経済支配下の「平和」）であり、つかの間の物質的豊かさを、みんなで楽しもうという体制です。そのために自然環境が壊されて、食料危機が起こったり、未来の世代の生活の糧になるようなさまざまな資源が枯渇したりしても、紛争が続発してもしかたがない。そういうときにも、金と軍備と米国の後ろ盾さえあれば大丈夫、と考えるような、そういう大きな流れの中に私たちは身を委ねてきたのではないかと、いうことです。

## 人口の約半分が障がいをもつ人のまち「エルメロー」

オランダのアムステルダムから電車で30分ぐらいの郊外に緑豊かなエルメローという町があります。浦河の「べてるの家」の人たちもここを訪ねています。この町は精神病院を真ん中にしてきた町です。町中に精神科病院をつくったのではなく、まず病院があって、その周りに城下町みたいにだんだん形成されていった町です。現在は人口の半分が何らかの障がいをもった人たちで、目抜き通りにあるカフェなどでは、精神的・知的・身体的な障がいをもった人たちが普通に働いている。とてもおしゃれな町です。また、ここはヨーロッパの中でもエコロジカルな町としても有名で、「最もグリーンな町」に選ばれたこともあるそうです。それもあってか、この町は観光客にも人気で、その収入も多いそうです。エコであるとか、病院が真ん中にあるとか、障がい者が生きいきと暮らしているということは偶然三つの要素が重なったということではなく、深いところでつながっているのではないかと考えさせられました。

## ジャングルへようこそ

脳性マヒの詩人でパントマイマーの宇宙塵<sup>うちゅうじん</sup>というナマケモノ倶楽部の仲間がいます。彼はこう言ったことがあります。「僕たち障がい者はどうせ負けるんだ。肝心なことはどう負けるかだ」。じっくり考えてみる必要がありそうな味わい深い言葉でしょ。老、病、障がい、死。どれもある意味での弱さと敗北の記号です。

現代社会の中でふだんは疎んじられ、無視され、隠されているこの老、病、障がい、死などの弱さを集めてきて、狭いところにごちゃごちゃに詰め込んだのが、この夏僕が仲間たちと訪ねた千葉県木更津の「井戸端げんき」です。古い民家の玄関に大きな張り紙があって、「ウェルカム・トゥ・

ザ・井戸端ジャングル」と書いてある。

宅老所「井戸端げんき」を運営するNPO法人井戸端介護の第一の特徴は、利用者とスタッフの間に明確な境界線が引かれていないことです。ホームページには「利用者、スタッフ、ボランティアが共に活動し、楽しさを分かち合えるような介護関係を目指しているから、制服やエプロンは着



用しない」。変な言い訳に聞こえますが、そんな言葉がトップページにいきなり出てくるのです。

一層複雑なことは、利用者と呼ばれている高齢者と、常勤とパートからなるスタッフのほかに、「メンバー」と呼ばれる何だかよくわからない人たちがたくさんいます。さらに、その人たちの家族と称する人たちが出入りしている。何だかわからない人が威張って真ん中にどーんと座っていたりする。

「井戸端」というのはこれら全部からなる共同体、コミュニティのことなんです。こんなふうだから、もちろん予想もできないことがしょっちゅう起こる。代表の伊藤英樹さんはこう言います。「要するに何でもありだ。こちらからこうだという形を押し付け

ない。押し付けていけば、何か起こったときにあたふたしちゃう。押し付けなきゃいいんだ。その都度形を変えながらやっていくのが井戸端の流儀」だと。

## 居場所は自分でつくる

伊藤さんは「ほかに行き場がないということこそ、ここに来るよい理由だ」とも言います。これは思想家の言葉ですね。スタッフでも利用者でも行き場を失っている人たちを優先的に引き取る。スタッフたちに「偉いね」と言われたり、自分でふと思ったりしませんか、と聞いたら、「えっ、偉いだなんて、私たちのほうが助けられているのに。おかげで私たちも居場所をもらってるんだから……」とナチュラルな微笑みを浮かべながら言うのです。認知症のお年寄りがいるのはもちろんですが、統合失調症、失語症、うつ、さまざまな悩みを抱えたり、心に傷を負った人たち、仕事に追われてうつ病になったサラリーマンとか、ちょっとおかしくなった元看護師などが、ここにいるわけです。

そして、伊藤さんが言うには、「利用者とスタッフの区別を超えた、ごちゃまぜの人間関係の中でそれぞれが役割を見だし、その人らしさを取り戻していく。社会に居場所のない人たちが自分たちで居場所を創造していく」。

この社会は強者に合わせてできている。強くて、効率的で、より速く、より多く富を生産するような人材を社会は求めている。だから、そこから落ちこぼれた人、何か支障をきたした人、遅い人には居場所はないのです。それが競争社会というもので、そこでは居場所を失うのも自己責任です。でも、と僕は思うんです。社会というものがすべての人に居場所を与えられなくなったら、社会として失格だ、と。とすると、僕たちは今、とんでもない失格社会に暮らしていることになる。

「居場所をよこせ」と僕たちは運動もします。僕も運動家の一人です。それも大事でしょうが、「井戸端」では、居場所がなくなった人たちに居場所をつくっていこう、ついでに自分の居場所もつく

っちゃおう、ということをやっています。そこにはかつての団塊の世代の運動家たちみたいに気負ったところが全然ありません。

そこで大事なことは多様性です。あの玄関の「ジャングルへようこそ」の意味はそこにあるのだと思う。ジャングルというのはもともと森林、特に熱帯雨林のことです。そこはまさに生物多様性の宝庫です。同じように、「井戸端」というジャングルにも多様な生き難さを抱えた人々が集まって、一種の生態系のバランスをつくり出しているということではないか。バランスというのは一回つくったらずっと大丈夫というものではなく、刻々動き、変化しているものです。それでこそ「生態系」です。僕はその意味で、「井戸端げんき」に生きたジャングルを見たと感じた。そして、世間が褒め称える「勝つ」ということの虚しさ、「強さ」ということのつまらなさとともに、「弱さ」の楽しさを実感したのです。

## ゲット ダーティ (汚く生きようぜ)

この3～4年間、特に3・11の後、いろんなことをやってきました。そのなかに映像づくりがあります。最近の若者が本をあまり読んでくれないので、教育のメディアとして映像が必要になっているという背景もあります。エコロジーの思想というと、これまで日本ではどうしても欧米のほうを向くことが多かったわけですが、もっとアジアに、そしてその思想的伝統にもっと注目したほうがいいのではないかとずっと考えてきたこともあります。アジアの中に何千年の間培われてきた英知に注目しながら、自分なりのエコロジー思想を組立て直したいと、自戒も込めて考えたわけです。

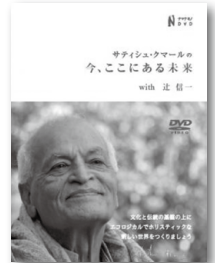
「アジア発、21世紀のための叢智」というDVDシリーズです。1本目にインド人の思想家サティシュ・クマール、2本目に日本の自然農の大家、川口由一。そして3本目がファン・デグオンという韓国の思想家です。

つい最近も韓国に行っていました。南西部のチョルラド（全羅道）という、金大中の出身地であり、あの光州事件の場所でもあり、韓国の民主化運動の温床となった地域です。その民主化運動に共感したり、それを応援したりした僕たちの世代にとっては胸がワクワクするような場所です。韓国で一番食べ物うまいことでも有名です。

DVDシリーズの第3巻を韓国でお披露目することが目的でした。民主化運動家だったファンさんは1985年、当時の軍事政権が捏造したスパイ事件の首謀者という無実の罪で無期懲役の判決を受け、1985年から恩赦で出獄する1998年、つまり13年間を独房で過ごしました。獄中で疲弊し傷ついた彼の心と身体を癒やし、支えたのが野草でした。野草の研究に没頭し、しまいには100種以上からなる野草園を刑務所内につくりあげます。

獄中から肉親に送り続けた絵手紙が、2002年に『野草手紙』という本となり、韓国でミリオンセラーとなりました。われわれのDVDは、ファンさんへのインタビューを通して、彼が獄中でいかにして独自の深遠なエコロジーと平和の思想を紡いでいったかを検証した映像です。

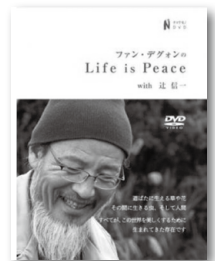
●ナマケモノ DVD シリーズ  
各 2,500円 (税込) お申し込みは、ナマケモノ倶楽部  
オンラインショップへ  
<http://namakemono.shop-pro.jp/>



①サティシュ・クマールの今、ここにある未来 with 辻信一



②川口由一の自然農というしあわせ with 辻信一



③ファン・デグオンのLife is Peace with 辻信一

現在ファンさんは、チョルラナムド（全羅南道）のヨンガンという町の郊外に「生命平和村」を建設中です。そこから30 kmの海辺にはヨンガン原発があります。「行ってみたら原発があった。何かあればこもすぐホットスポットだよ」と彼は笑います。ファンさんの周りにはいつも凜と澄み切った空気が漂っている気がして、これは何だろう、と。そのヒントは、彼の言葉「トロッケサルジャー（汚く生きよう）」にあるんじゃないか、という気がしてきたんです。英語で言えば「ゲット・ダーティー」。ダーティーはダート、つまり土という言葉の形容詞なんだけど、それが「汚い」という否定的な意味になってしまっている。

ファンさんは絶望の果てに、獄中で野草と出会った。野草をじっと見ると、そのなかにもうごめいている虫たちがいて、土があります。土の中には無数の微生物、小さな虫たちが生きている。それら、無視され、疎んじられ、嫌われてきた「弱さ」たちが息づいているような低い場所へ下りていかなければいけない。それらに向き合う、そしてそれらと交じり合わなければいけない、とファンさんは考えたわけです。それが「ゲット・ダーティー」です。そのことを悟ることで、彼はよみがえったのです。一方、雑草、虫、微生物、土を忌避することによって、それらをおとしめることによって、現代文明は崩壊の危機にあえぐことになったのではないのでしょうか。「野草とは何か」という問いに、ファンさんはひと言で答えました。「それは人間が自然へと回帰するための扉だ」と。

## 弱さを真ん中にして、そこへ向かう

駆け足でしたが、僕が「弱さ」という言葉で言おうとしていることが少しわかっていただけたかと思います。「スロー・スモール・シンプル」という言葉を合言葉にナマケモノ倶楽部の仲間たちとやってきました。「スロー・スモール・シンプル」、みんな「弱さ」の言葉です。強くありたいと思ったらオリンピックですよ。より強く、より速く、より遠く、より高く……。相変わらず社会のほとんどの人はそっちの方向で生きていこうと思っている。それはつまり、死ぬつもりがないということです。この世の中は、相も変わらず自分だけは老いないつもりで、自分だけは死なないつもりで、自分だけは病気になるないつもりで生きている。無限の経済成長なんていうのはそういう幻想に基づいているわけですね。

今日はテーマとして脱原発を掲げた集まりだったんですが、とうとう原発のことまで届かなかった。でも、最後に言わせてもらえば、原発って「強さ」の幻想の果てに生み出された怪物なんです。われわれの脱原発運動は、社会全体が相変わらず強がってばかりいるときに、逆に「弱さ」に向かっていくようなものでありたい。そして、エルメローの町がそうであったように、「弱さ」を真ん中にして、それに向き合いながらコミュニティーをつくり、社会をつくっていく。持続可能なコミュニティー、幸せな社会というのは元来そういうものだと思えます。

### ●ナマケモノ倶楽部：

1999年7月に生まれたNGO。つながりを大切にするスローな社会をめざす。環境と経済はつながっていることを認識し、これまでの大量消費型の社会にかわる新しい文化を創り出す。「スロー」や「GNH (Gross National Happiness)」に注目しながら、個々人の暮らしの中で「私にできること」を提案・実践していく。

<http://www.sloth.gr.jp/>